

中世・草戸千軒探検 17

たがや
～耕す～

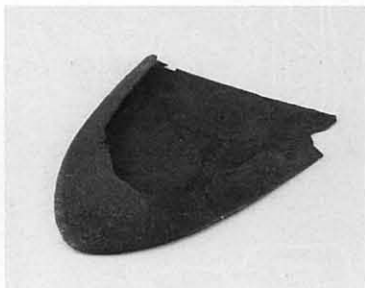
草戸千軒 I 展示室では、今からおよそ 600 年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生

活の様子を紹介しています。

前は、「履く」のコーナーに展示した履物を紹介しました。今回は「耕す」のコーナーから、農業に関する資料を紹介します。



柄の付いた状態で出土した鎌



犁の「さき」
(地面を掘るための部品)



犁の「へら」
(掘り起こした土を返すための部品)

「へら」は、その後、福山市近辺の民俗資料などとの比較検討が進められ、犁の全体像が復元されています。

このように、草戸千軒町遺跡の出土品は、中世の農具の研究を進める上でも、重要な役割を果たしているのです。

(主任学芸員 鈴木康之)

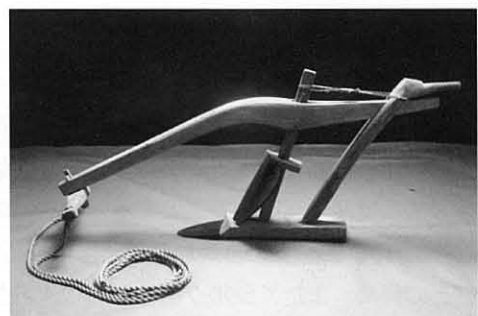
これまで、草戸千軒は、商業・金融業・手工業などのさかんな「町」であったことを紹介してきました。しかしその一方で、農業や漁業などに関する遺物も多く出土しています。

今回は、まず農業に関する資料を紹介しますが、芦田川の河口近くに位置する草戸千軒の周辺は海水の影響などもあり、それほど恵まれた耕作地が広がっていたとは考えられません。したがって、遺跡から出土している農具は、この集落に暮らす人々が利用したものとは考えにくく、周辺の農村で使うために、この集落で作られたり、修理された道具が多いのではないかと思います。

出土している農具には、鋤・鍬といった土を耕す道具や、鉞や鎌などの刃物類のほか、脱穀のための杵や臼、菰を編むための錘、布や藁を打って柔らかくするための砧といった、農業副産物の生産に関わる道具もあります。

鎌には、刃先のみが出土しているもののほかに、柄の付いた状態の資料もいくつか出土しています。これらは、絵巻物などの絵画資料では詳細が明らかにできない、鎌の柄の取り付け方法を具体的に知ることのできる重要な資料です。

また、日本列島における農具の研究を大きく進めることになった資料が、牛に引かせて土を耕す犁の「さき」と「へら」です。室町時代後半の遺構から出土したこの資料の分析によって、島根県益田市（旧、匹見町）で明治時代に出土し、それまで古墳時代を代表する犁の「さき」であると考えられてきた資料が、実は中世後期のものであったことが明らかにされています。この「さき」



全形が復元された犁